



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111  
第9号 平成26年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

## 飯能の屋台囃子と植物を学ぼう

● 第9号の特集は「飯能の屋台囃子と植物」  
今回は飯能市内の屋台囃子と植物を特集しました。飯能の屋台囃子については、3回シリーズの最終回となります。これまでの内容を参考に、改

めて飯能まつりなどを見てもみるのも良いのではないのでしょうか。また、飯能の植物については、前号の加治丘陵の植物に続いて天覧山・多峯主山の植物を特集します。

### 特集「飯能の屋台囃子」

飯能市文化財保護審議委員会委員  
小槻 成克

1 **はじめに** 現在飯能各地で祭りやイベントが盛んに行われています。

なかでも伝統ある寺社の祭礼では、神事のほかに付け祭りとして獅子舞やお囃子、双盤鉦、太神楽等の郷土芸能が多く見受けられ、とりわけ屋台囃子は比較的手軽なためか、今でも多くの地域で実演・伝承されています。

2 **いつから** もともと、屋台囃子は地元の神社の祭礼を一層賑やかにするために取り入れられた余興の一つです。当初は近在の囃子連を呼んで演奏してもらっていたところ、囃子の演奏自体が楽しいと知った地元の青年たちが中心になって習い覚え、地域に根付いていきました。

飯能に囃子が伝わった時期は定かではありませんが、言い伝えによると江戸末から明治の初め(1860年代)にかけて南高麗地区の間野や下畑で神社の祭礼に山車を曳き、屋台囃子を乗演したといわれ、また原市場地区の石倉では江戸末頃から太神楽獅子舞の合間に屋台囃子を演奏していたようです。飯能地区原町でも明治初年に川越新宿町から屋台囃子を習い覚えたそうで、飯能では少な



くとも明治初年には屋台囃子が伝わり、演奏していたようです。

その後、屋台囃子は隣接、または経済的・人的に関わりが深い地域に伝播し、自前の山車や屋台を手に入れて地元の神社祭礼に繰り出すなど、ますます盛んになり及び、現在飯能市内では24の囃子団体が活動しています。

3 **2大流派** 飯能で活動している囃子団体は「神田囃子大橋流」(8団体)、「小田原囃子若狭流」(11団体)、「神田囃子系囃子」(2団体)、「太神楽系江戸囃

子」(2団体)、「神田流馬流」(1団体)の5系統ありますが、大半が「大橋流」と「若狭流」の屋台囃子を奏しています。

「大橋流」は、入間市東金子地区新久より南高麗地区の下畑、上畑に、また新久から入間市西武地区仏子を経由して精明地区の双柳にそれぞれ伝承され、その後吾野地区や飯能市街地各町へ伝わったのち、毛呂山町、越生町、川越市、坂戸市など他市町へ伝播しています。

一方、「若狭流」は、川越の新宿町から飯能地区の原町へ伝わり、その後飯能市街地各町や越生町、入間市、坂戸市、狭山市などに伝承されます。

どちらの流派も東京の神田囃子など現行の「江戸囃子」にくらべ、バチ数も少なくリズムも単調でテンポもゆっくりしており、古風な曲調を伝えていると思われます。

**4 お囃子の実際** 飯能に伝わる屋台囃子は、江戸囃子のなかの「五人囃子」で、篠笛=1人、附太鼓=2人、大太鼓=1人、摺り鉦=1人の5人一組で演奏します。曲目は「屋台」「仁羽」「四丁目」「昇殿」「鎌倉」「神田丸」などが代表的で、「仁羽」「四丁目」は単調なフレーズを繰り返す賑やかで軽快な曲、「屋台」はダイナミックなバチさばきが聴きどころの江戸囃子を代表する曲目、「神田丸」は一つとして同じ叩き方を繰り返さない難解・高度な曲、「昇殿」「鎌倉」は静かものとも呼ばれる、笛の妙技を魅せるゆっくりとした格調ある曲です。

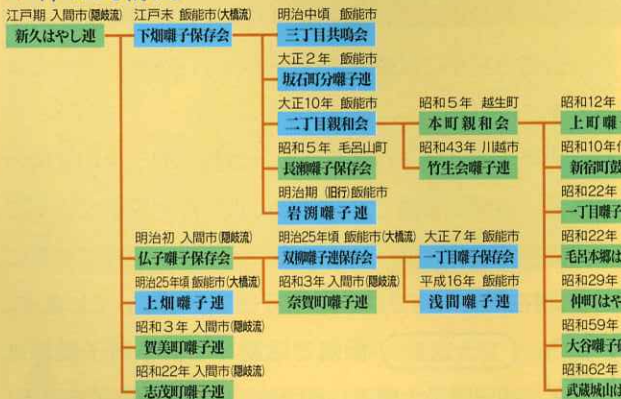
実際の演奏では、笛のリードで緩急取り混ぜながら各曲を次々に演奏する組曲スタイルで行われ、聴く者を飽きさせない構成となっています。

また多くの曲には面踊りが付き、「仁羽」「四丁目」にはどっけ道化(ヒョットコ、オカメ、バカ面等)、「屋台」では天狐、外道そして獅子などが演じられます。特に外道は大振りな面を使って両手に幣束を持ち、祈りにも似た全身をよじる所作で観客を魅了する飯能を代表する踊りです。

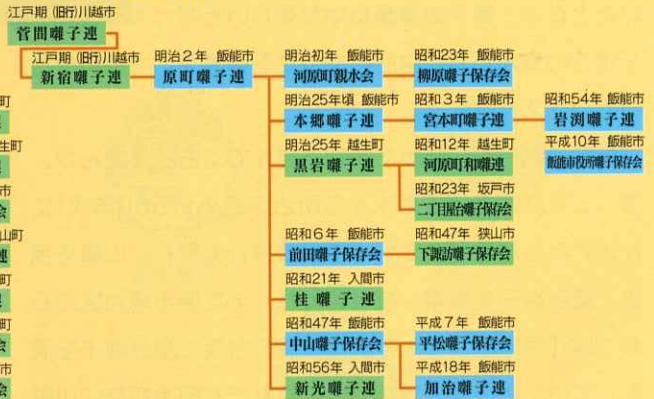
**5 「囃子連」** 屋台囃子を演奏する団体を「囃子連」(=囃子保存会)といい、町内会や神社に属し町内会館や社務所で定期的に練習会を行って囃子技術の向上をはかり、町内代表としてお祭りに臨んでいます。当初は囃子好き同士の愛好会でしたが、近年では大人から子どもまで幅広い世代が参画して、青少年の健全育成・次世代への継承を視野に入れ活動しています。市街地など複数の町内会が参加するお祭りでは、各町囃子連の競演が対抗意識を生んで技術の向上をうながし、祭りに活力を与えているそうです。

**6 これからの課題** いつまでも隆盛が続くと思われた囃子ですが、近年の少子化による子ども世代の減少は深刻で、このままだと屋台囃子伎芸の次世代継承も心配です。特に農山村部の囃子連は、会員の高齢化と相まって会の活動・存続も危ぶまれます。このような危機的状況を脱するため、各囃子連では地域に居住していなくても、地域に縁がなくても加入可能にしたり、地元小学校で屋台囃子講習会を開催するなど、祭礼以外のイベントにも積極的に出かけ子どもたちに実演の機会を増やしたりして、子ども会員の確保に力を注いでいます。

◆ 神田大橋流



◆ 小田原若狭流



◆ 神田囃子系

◆ 太神楽系江戸囃子

◆ 神田流馬流

**1** **天覧山・多峯主山** 天覧山(195m)・多峯主山(271m)は、山地帯から丘陵帯へと移る場所で、その南に入間川があり、その川が形成する扇状地の扇頂に位置しています。その北には、高麗川が流れています。市街地に近いにもかかわらず、スタジイなどの自然林、コナラなどの二次林、スギ・ヒノキの人工林や、谷津田の休耕田や湿地、草原など比較的自然が良く残っています。休日になると、森林浴をかねて多くの人たちが散策に訪れます。ここでは散策の折に植物も観察できるように紹介します。

**2** **湿地の植物(天覧入り)** 市民会館の駐車場を出発して、能仁寺の西側、川沿いを歩いていくと、休耕田・湿地に入ります。市内では水田が少ないので、湿地の植物は、そう多くありませんが、意外と珍しい植物があります。

春、雑木林のコナラの葉が展開していない明るい湿地には、一面黄色い色をした花が咲いています。ネコノメソウです。この花を見ると、春の到来が感じられます。道沿いには、うす青い色をしたセリバヒエンソウ(帰化植物)、スマイルの仲間を見ることができます。



ネコノメソウ

初夏～夏になると、ヌマトラノオ、オカトラノオの白花。チダケサシの桃色。ノカンゾウ、ヤブカンゾウの橙色。盛夏には、ミスタマソウの白い花とともに、水玉のような果実。

秋になると、ススキ(古名は尾花)の下にはナンバンギセル(古名は思い草)。この植物は、ススキの根元によく寄生します。ここはススキの群落が多いので、ナンバンギセルがよく出てきます。万葉集の歌の中に、

「道の辺の尾花が下の思ひ草

いまさらさらに何をか思はむ」

という歌があります。それが思い出されます。湿地には、

ミノソバ、サクラタテ、シラゲヒメジソ、アキノナギツカミなどの桃色。ヤマハッカ、アキノタムラソウなどの紫色。ユウガギク、ノコンギク、シロヨメナなどの白色。ヤブツルアズキやキンミズヒキの黄色。また、葉腋にむかごをつける



ナンバンギセル

セリ科のムカゴニンジン。水田にはヘラオモダカなど多くの植物が見られ、より一層鮮やかな季節になります。

**3** **山の辺の植物** 能仁寺の東側、天覧山に登るハイキング路を登っていくと、湿地とは異なる植物があります。

春には林の中にミツバツツジの紫色。林床にはシュンランをはじめ、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、少々湿ったところには、エビネの可憐な姿を目にします。ヤマツツジが咲く頃には、緑が一段と鮮やかになります。新緑の季節の到来です。少し遅れて同じツツジの仲間ですが、ハイカツツジの白い花を見つけることができます。白い小さな花を、ウメの花に見立てていますが、清楚な感じがする植物です。

ノヤマトンボ(オオパントンボソウ)、コ克蘭などが咲き始めると夏の季節です。

夏というと、やはりヤマユリの白い清楚な花が代表でしょう。茎の先端にたくさんの花を重



エビネ

そうにつけています。独特な香りを出していますので、すぐにわかります。オオバギボウシ（トウギボウシ）の淡紫色の花は大きくて、林の中でもよく目立ちます。春先の若葉は「ウルイ」と呼ばれ、ほんのりとした苦味とぬめりがあり、山菜としてよく知られています。



オオバギボウシ

秋になると、やや湿ったところには、アケボノシュラン。林床にはキッコウハグマ、カシワバハグマ、シラヤマギクなどのキク科植物や、木の実、草の実が良く目につきます。ムラサキシキブやヤブムラサキなどの紫色。ツルリンドウ、ガマズミ、オトコヨウソメ、ウメモドキ、マンリョウなどの赤色。瑠璃色<sup>るりいろ</sup>のノブドウ。やや大きいカラスウリの朱色。花はかわいいが、いやな臭いがする黄土色の実をつけるヘクソカズラなどが私達を楽しませてくれます。



ツルリンドウの実

4

**シダ編** ここにはシダ植物だけでも約80種類あり、県内でも珍しい種が自生しています。ナチクジャク、キヨスミヒメワラビ、ウラジロなどがそ

れです。やや湿ったところに生育していますから、登山道から確認することは難しいです。また車道には、石垣の中にヒメウラジロ、吾妻峡にはヘラシダなどがあります。これらは県の希少野生植物に指定されています。



ナチクジャク

5

**番外編** ハンノウと名前がついた植物には、ハンノウザサとハンノウツツジがあります。ハンノウザサは、1926年に植物学者の牧野富太郎先生により新種として、植物研究雑誌に発表されました。現在はアズマザサの品種として考えられています。また、ハンノウツツジはサツキとヤマツツジの雑種であろうといわれています。ヤマツツジと他種のツツジ類との交雑種は、日本各地でたくさん見つけられています。ハンノウツツジも、その1つではないかと思われています。ちなみに飯能南高校はハンノウザサ、飯能高校はヤマハンノキ、市内の多くの小学校・中学校はハンノキを校章に用いています。すべてハンノウに由来していますね。



飯能高校



飯能南高校



一例として飯能西中学校